

見えない所で、 見えるものを支える

会計理事 並木淳治



現在の家に住み出して早29年になります。当時は造成地に我が家がぼつんと建ち、何遮ることなく道のすぐ向こうに小学校が建っているだけでした。早速潤いを求め庭木をせっせと植えることになりましたが、不思議なことが起りました。元気で育ってきた木がある日突然、枝先の葉が日焼けを起して枯れてくるのです。このようなことが何度か起ったのです。当初、病気か虫が入ったのではないかと感じておりました。風が吹き荒れた翌朝、ふとある木に触ってびっくりしました。実は、本当は何もびっくりすることではなく、全くの私の無知から起ったことだったのです。その木は、昨日までの頑強さがまるでなく、ぐらぐらと立っているだけなのです。木の根元を見ると、何と幹を取り巻くように地面に丸くひびが入っているのです。そうだったのか！とやっと気が付いたのです。

ろくに支柱も付けられていない木は、台風や春の突風に枝葉が吹かれ、幹や根が大きく揺すぶられていたのです。根は、前後左右に大きく揺すぶられ、始めに根の先の細い毛根が切れ、地中での定着性を著しく落とし、ついには大きな根もずるずると土から離れ一気に幹の安定性をなくしたのでしょう。翌朝見れば木は一見真っすぐに立っています。しかし、根は既に地中から養分、水分を吸い上げる力はありません。木は、本来恵みのはずの太陽の光を受けて、次々にその葉を枯らせていったのです。当たり前のことが、当たり前のように起ったわけですが、訳を知らない目からは、木の突然死のように見えたのです。

かつて、NECの中興の祖“小林宏治”元会長・社長がNECという企業全体の活動を一本の大木で表現した“NEC ツリー”なるものがありました。根は共通要素技術を提供し、その養分で育った幹からせり出した大きな枝が今でいうビジネスユニット群を表し、その枝々に茂る葉は、お客様を表す太陽の日を一杯に浴びてすくすくと育つという図でした。

ビジネスユニットを表す木の幹や枝は自然の中で、風雪にさらされ右に左に大きくたわむようになっていますし、それで折れていては大木には成長しません。片や、R&Dを表す根はしっかりと地面に食い込み、日々の風雨に動揺せず、創造力の源をしっかりと供給するのが使命なのです。人間、見えないものはないものと思いがちです。しかし、多くの場合、見えない所で、見えるものをしっかりと支えているものがあるのです。

確かに、当時のNECツリーの根は地上の枝ぶりをも凌駕する立派な張り出しで表現されていました。小林社長は、“経営者は立派な根を育て、枝の隅々まで日が当たるように枝々を剪定する庭師だ”とっておられたことを今更ながらに思い出します。根は製造コストではなく、投資なのです。

さて、振り返れば地味ではありましたがここ数年景気は好転の道をひた走ってきました。そして、その原動力が強いテクノロジーであることは、好不況をあやなす企業群を見れば明らかです。ありもしない“Solution力”を頼りに“Best of Breed”などといって自己研さんを怠れば、オープン環境で得られるものは差別化技術などではなく、陳腐化・はん用・成熟技術だけなのです。そしてその弱体“Solution力”を隠ぺいするために、オープン環境の世界市場を逃れ、なれ合いの国内市場、既成市場回帰でしのごうとすれば、成長戦略とは対極の縮小・撤退の連鎖地獄が待っているのです。

電子情報通信学会員の皆さん！ 特に若い開発研究者の皆さんへの期待は昔も今も、これからも強い根を担うことです。根と枝葉とは役割も、特性も、環境も、全く異なるものなのです。そして、それでいて、お互いのバランスが大事なのです。今こそ、しっかりした根を張らせるための環境を守ろうではありませんか！ がんばれ日本！ がんばれ若き学会員。